

## 龍 秀美

近年は若い人たちの感性にひとつの傾向があるように思われる。比喻にせよ寓意にせよ、結論が開いているというか、訴えたいことを読み手の「好み」に任せる感覚とでも言うか。これは、結局は訴えたいことを表現するためにレトリックを使うというのとは違っているように思える。開かれたかたちで見えないものを探りながら、その先に何をみるか。また感性だけではない思想の探求を短詩形の中でどう形作っていくか。

特に年度末になるに従って、十代を中心にした若い人たちの優秀作品が多くなった。時代や世界の状況が変わろうとしているのか、感性の質が違ってきたような気がした。

また自薦によるエントリーというやり方は、ことに若い人の場合難しいと感じた。今回は新人賞と奨学生との両方に応募・入賞した人が1名。昨年奨学生に入選し今年は奨励賞を受けた人が1名。昨年と今年連続で奨学生に入選した人は5名を数えた。

一方、今年活躍した16歳「さいう」は質量ともに新人賞も射程に入る実力と思うがエントリーしていない。昨年奨学生を受けているので遠慮したのかも知れないが残念だった。書き続け、また作品を世に問うことが向上につながる。是非続けて欲しい。

以下、記憶に残った作品をランダムにあげてみる。奨学生に選ばれた人たちの実力は伯仲しており、ここに挙げたものだけが良いというわけではないので悪しからず。

長谷川柊香（22歳・宮城県）

枯野ゆく槍持つように傘持って

内濡れた／マスクを／振れば／国旗めく

紫陽花を亡子の脳と思うまで

藤ほたる（22歳・神奈川県）

長生きは望まないからタンポポの／綿毛みたいな性器く  
ださい

首すじも乳ぼうもさらしたよ／けど 私の中の紫の鳥居

立花ばとん（20歳・東京都）

僕は／殴る／啄木は／改行する

自己と 他社

折田日々希（20歳・神奈川県）

父親が／高野豆腐を／日没のように食べてて／雨に似る箸

松下誠一（18歳・東京都）

青空の野線として電線を、／僕らが利き手で掴む焦燥

白野（19歳・新潟県）

肺呼吸だからいけないのか／きみは水族館でわたしを見  
ない

中矢温（22歳・東京都）

凍滝や犬ふがふがと臭い息

吉沢美香（22歳・宮城県）

雪と水水と雪水入れかわる

吉富快斗（18歳・埼玉県）

敲き土掃けば幸徳秋水忌

源楓香（20歳・北海道）

私たち存在ごっこ／前髪で目を隠したりして

豊富瑞穂（19歳・茨城県）

放課後を急ぐわたしの／しばらくは悩んでもいい／おに  
ぎり売場

浅葱（21歳・愛知県）

2番出口の階段を上る間の感情／だけを連ねた日記

あお（23歳・奈良県）

真っ青な顔で飛び込んできて／間違えましたと出ていく  
青春

桜咲（17歳・千葉県）

民族は／デザインだ

保育士の姉は／その言霊はよかったかな？／と叱っている

加藤悠（17歳・愛知県）

幸せに暮らすことしか許されない／ジジババさまの不幸  
な生活